

飛身長目

通巻181号 平成30年12月1日発行

「開頭」64号から

巻頭言

秋と永遠

森信三

秋になるとそぞろに永遠が思われる。もっとも私にとつて、永遠を思う季節は必ずしも秋だけではなく、冬に入ってから私は永遠を思うことしばしばである。あの樹々の全く枯れ尽くした冬山を見る時、特にその涯てに雪を頂いた遠山を見るごとに、私は人生の倏忽（しゅつこつ）と永遠とを思わざるを得ない。だが冬において感じられる永遠は、いわば凝固死静の永遠であるが、それに対して、秋を通して観じられるのは、「動く永遠」であり、さらには「生ける永遠の動き」である。かくしてまた現在のような時代においては、永遠を思うということも、常に個人的な立場から人生の儂さを痛感するという程度にとどまるべきではないであろう。現在において真に永遠を思うとは、時代の激流を通して、人類の歴史の志向する方向を洞察する事ではなくてはなるまい。永遠とは単に時間の無限延長を意味するものではない。永遠の真の内容を形成するものは、真実そのものであって、時の無窮は、いわばその外的投影に過ぎない。されば現在において、真に永遠を観ずるといふ事は、この未曾有の

歴史的激流を通して、動きつつある「人類の真実」への希求が奈辺にあるかを洞見することではなくてはならない。特に教育という営みは、一方からは深く民族の現状と切り結びつつ、他面その志向するところは常に人類の将来への民族自身の自己形成に拘わっているが故である。かくしてわれらにとつて真に永遠を観ずるとは、この時代の激流のさ中に如何にして「人類の真実」を徹見するかということの外ないであろう。（「開頭」昭和27年11月5日発行 11月号 通巻第64号）

本屋巡り

読書論 その2

森信三

■読書の楽しみ

もし人あって私に対して何が一番楽しいかと問われるとしたら、答えは二つになる。その一つは志を同じゅうする誌友諸氏と相逢つて語ることである。教育を中心として、この時代の激流と人生とについて、一夜を語る事は、何とも言えないしみじみとした楽しさである。しかしこのことは相手がいる事故、機会が恵まれないければその悦楽も享受しがたい。

これに反して読書の方となると、全く自分一人で随時随所になし得る事なので、前者とはおのずからその趣が違ふ。昔か

ら独楽（どくらく）という言葉があるが、読書ほどの独楽の語にふさわしいものはないかもしれぬ。歌や俳句を作ることなど昔から「相手の入らぬこと」として

その点も一つの長所と考えられてきたようであるが、しかし私自身の経験から言えば、歌なども出来上がるとやはり一人だけで楽しんではいられなくて、誰か多少でも分かってくれる人に見てもらいたいという気になる。これが出来ないといどこか落ち着かぬものがある。この点読書は完全に独楽の境である。これも思えば当然のことで、ちよっと考えたと、読書は自分一人だけのことのようにであるが、実際にはもう一人著者というものがあつて、いわば二人で相對しているわけである。いや相對しているというよりもむしろ、読んでいる間は、読者は著者の前に伺候（しこう）しているという方が近い。そのせいかとにかく書物を読んでる間は、少しも退屈というものを感ぜない。私にとって何が終生の楽しみかと同われれば、それはやはり読書という他ないわけである。

■知らず書店に引きこまれる

さて読書の楽しみを語るにあたって、どうしても一つ落とすことのできないのは、書店に吸引される私の心である。こ

れは何とも言えない異常な強さであつて、どんなに言葉を尽くしても、その真の趣を他人に分かつてもらう事はできない気がする。

何か用事があつて街へ出たとしても、もし時間の都合でどうしても書店へ寄れなかつた場合は、何とも言えず物足りない虚ろな気になる。まるで「宝の山に入つて、宝を得ず」に帰つてきたとでもいう感じである。つまりこの気持ちは、これを端的に言うとなれば、結局私にとつて、街の存在意義は、ただそこに書店があるからだ……ということになるらしい。いつか言うたことがあるかと思うが、私はもし街に大きな古本屋が二、三軒と大きな新本屋があれば、人口2万か3万位の町に住むのが一番落ち着くような気がする。これに類した事はケール先生もどこかで言つておられかと思うが、とにかく私の理想の居住地はそうしたもので、つまり大きな古本屋があるということが絶対的条件なのである。ところが人口が2、3万であれば一通りの新本屋に事欠くまいが、古本屋となると事情は全く違つてくる。人口1、2万では貸本屋に毛の生えた程度の古本屋しかないというのが一般である。このことは戦前でもそうであつたが、戦後……特に最近に至つて、ことに著しい。

私が先に理想の街の条件として、新本屋は一軒で良いが、古本屋の方は、どうしても三軒いると考へたのはなぜであろうか。それはもともと新本屋というものは、どこの店行つても大体皆同じような書物しか並んでいないものである。その上並んでる書物が、大体三月か半年ぐらいついでに変わるのが大部分を占め、書店としての深さとか厚さというものが感じられないのである。つまり一口に言つて平べったい感がするのである。そこへいくと、古本屋の方は全くその趣を異にする。どんなささやかな古本屋でも、それが古本屋であれば、やはりひと覗きしてみるだけの値打ちはあると云つてよい。

どうしてもそこに掘り出し物がない言えないからである。ための私の経験から言えば、どんなみずぼらしい本屋でもそれが古本屋である以上まず一棚は一見に堪え得る書物があると言えそうです。この真理は大体80%以上の妥当性を持つと言つても良いと思う。もつともこうしたこととの言えるのは、一面からは私が雑学で、あらゆる方面への関心を持つていうといふことも関係がありはするであろう。

実際私の古本屋に対する関心の異常さは、普通の人には分かつてもらえないと思う。まあそれを表す一番近い例えとしては、蕩児（とうじ）が娼家に心惹かれ

るにも比すべきであろうか。とにかくその前を通つたらどうしても入れるわけには行かない。それどころかその2、3丁近くへ行つても、もう心惹かれて気がそわそわしてくるのである。

そこで家内と一緒に街へ用足しなどに
出向いても困るのは、この一事で、古本屋が近づいてくると、心はいつしか上の空になり、どうしても寄らずにはいられないのである。ところが入つたら最後容易に出ない。それが家内にはやり切れぬらしいのである。そこで私達夫妻は一緒に街へ出かけても、帰りは多くの場合別々と言つて良い。

巡る古本屋の範囲は、大体大阪と神戸とであつて、京都までは手が届かない。実際は京都の古本屋が一番充実しているらしいのであるが、距離の関係上ちよつと気軽に行きかねるのである。もつとも今後はできれば隔月に一度ぐらいは京都へ行つて古本屋などを覗いてみたいものだと思つてゐる。

しかし現在の私には、一応大阪と神戸だけで事足りてゐるといつてよい。それは私の主義として、現在自分に与えられた環境の範囲内で、その時に一番読みたい本を読む、ということをもットーとしているからである。ここに私が一流の現実主義があるかもしれない。

■古書店の醍醐味

古本屋というものにはそれぞれ個性があつて……新本屋にほとんどそれが無いが……どの店には大体どういふ書物が多いかというようなことがかなりはつきりしている。しかしこの現象も戦後の古本屋の衰退とともに、次第にボヤけてきた傾向がありはするが……

私は古本屋に入ると、自分に関係のある部分については丹念に風潰しに見てゆくのである。……序でながら時々本屋で本屋へ飛び込むなり「○○という本はありませんか？」などと言つて尋ねる人があるが、あれは書物についてズブの素人というものであつて、そうした場合店員なり主人さえも「ありません」と答える例はほとんどないと言つてよい。たとえあつても知らない場合が大方であるから。したがつて書物の在否を尋ねるほどろくなことがなく、結局は自分で丹念に見ていくほかないのである。

もしこれはという書物が見つかったら早速手に取つてみる。そしてそれがどの程度の書物かと調べてみるのである。これが実に楽しい。だがいかに良書であつても、すぐにその場で買うという事は絶対にしてしない。一応通り過ぎて次を見る。こうして順々に見て行つて、その店を一通り見終わつてから、もし一冊求めると

したら、どれを選ぶかを考えるのである。そののみか多くの場合、その一冊さえその場では買わず、さらに次の店行く場合が多い。こうして数軒の古本屋を経巡つたあげく、初めて確信をもつて「どの書物を求むべきか」はつきりしてくる。

■本の読みくせ

私は書物を広告によつて注文して読むということは皆無に近い。生まれてから数えても多くはないと言つてよいほどである。とにかくどの本を読むべきかは、現場直接の真剣勝負で決め、買つたらすぐ電車に飛び乗つて、早速読み出すのである。その間髪を入れずに一気に……ということが、私の場合読書の秘訣であり、要諦である。同時にそこに読者が私にとつて生のギリギリの動的焦点をなしている所以があるといえよう。

〔開頭〕 通巻第64号 昭和27年11月号)

「政治」考 (微言)

森 信三

○古来「文字を知るには憂患の始めなり」と言われているが、全く文字は文化の中心的象徴として、深くその長短の両面を持つてゐると思う

○文字の長所は、端的に言えばそれが現実そのものを象徴するところにあるが、

同様に短所もまたそこから生まれてくる。その長とするとところは、文字が極めて寡少の視覚的空間を領有するにもかかわらず、その象徴する背後の現実の領域は広大なる点にある。

平成30年12月1日発行 通巻181号

○このような宿命的な長短を持つ点で、文字と共通性を持つものに「政治」がある。文字と政治とはその意味からは、この現実界の持つ2つの極言的なプロブレム（課題）とも言える。而して前者が静的なものに対して、後者は動的である。○政治の困難さは、何よりもそれが「人間が人間を支配する」点にある。もし人間以上の者が人間を支配するのならば問題は無い。しかるに政治は、本質的に全く平等なるべき人間同士の間で、支配と被支配とが行われるのである。

くもく（ひじちよ）

○「選挙制度」というものが、理屈の上ではいかにも良さそうに見えつつ、実際にやってみると俗臭紛々たる醜状を露呈するのは、結局選挙も「この人間による人間支配」という人間界の根本的課題の一種合理的なるカムフラージュにすぎないからであろう。

飛耳長目（ひじちよ）
○「選挙制度」と「暴力革命」を発端とする「独裁」とは、一見したところでは、全く消極的な異質物のように見えるが、両者ともにそれが、「人間による人間の支配」である点では、共通の基盤に立つと

言つてよからう。

○「権力による独裁」の不自然と不合理については、誰にもすぐに分かるが、「選挙」のうちには潜んでいる不合理については、ともすれば人これを看過しがちである。「選挙」に潜む不合理の根本的なるものは、それが金と自薦との抱き合わせに成立する点にあるであろう。

○戦争は長い間「不可避なる悪」と考えられてきたが、原爆の出現とともに、その終末の日も遠くないらしいことが、仄見えてきた。けれども、今や政治という新たな「不可避の悪」が人類の前に立ち塞がってきたかの感がある。

○しかしながら、政治が「人間による人間支配」という不可避的な罪悪性を内含（ないがん）している事は、何も今日になつて始めて出現した事柄ではない。否人類による人間支配としての政治の悪は、人類の切初（ごうしよ）よりあるのである。

○では政治というものをなくしてみたらどうか。恐らく人間社会は、その存立を維持し得なくなるであろう。人間社会の成立の基本条件として何らかの「秩序」が不可避であるが、同時に秩序の維持とは、何らかの意味における「人間による人間支配」を避けがたいからである。○かくして戦争という「第一の不可避悪」

の消滅は、今や時の問題となりつつあるが、政治という「第二の不可避の悪」はいつ消滅するか見通しさえつかない。おそらく人類の存在する限り存続するであろう。

○しかし「人間による人間支配」や人類の歴史の切初（ごうしよ）から存在しながら、それが人類の不可避の悪として、考えられだしたという事は、今や人類が正面切つて政治と取っ組み出したことを意味するもので、長い人類の歴史の上から見れば、ようやく薄明の微光が兆し初めたと言ふべきであろう。

（「開頭」通巻第64号 昭和27年11月号）

あとがきに替えて

森信三先生の「読書論」は茶飲み話的な感じで、全集第20巻の「読書論」とは全く異なる。膝を崩して読めると思う。微言は森信三先生の洞察力が漲るもので、現代の政界の現状にも当てはまる。人類はどう「権力」をコントロール出来るのか見通しは暗い。

（30日二繁）

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

電話 0744-4513422

Email: hji3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn